

中村圭三著：「フィールドの環境科学」

現場での感動と調査に立脚 ―基礎から論文執筆まで―，青山社，2007年，258p，2500円。

依然、環境関連書籍の出版ブームが続いている。それは環境科学の分野から環境技術、環境行政、環境経済学、環境社会学、地域環境活動、さらには環境教育や環境思想など、実に多岐にわたっている。ここで紹介する書籍はこれらの書籍と比べて特異である。それは環境科学の知識を網羅した一般の書でもなければ、限られた研究者向けの専門書でもなく、また入門書や啓蒙書の類でもない。サブタイトルにある「基礎から論文執筆まで」のとおり、環境研究の道筋をきわめて具体的に、特にその具体性を特徴として教えてくれる書籍である。この書は9章からなり、各章は実際の研究テーマごとに独立している。それらは著者が携わってきた研究テーマの一つひとつであって、それだけに研究フィールドを生きいきと伝え、その記述は高い説得力をもつ。それぞれの章における研究テーマの簡単なく解説とく研究との出会いの紹介の後、その研究への準備からその実際、すなわち研究フィールドでの観察・観測から結果の整理、考察・検討の手順や方法の一切を研究報告の形式に沿って詳細に記されている。

全章は次の3部にまとめられている。第1部の「気象・気候のフィールド環境調査」、第2部の「大気・水環境のフィールド調査」、第3部の「環境教育」、これらのジャンルが全体を構成し、そして、それぞれにおいて、純粋に気象学的方法や環境科学的方法、自然調査や環境調査の方法、さらには環境社会学的な研究手法が紹介される。以下に章を追って、少し詳しく説明しよう。

第1部では、先ず「局地風」(第1章)や「夜間の斜面の冷気流」(第2章)を取り扱い、さらに「海水と気象・気候」(第3章)、「生物と気候」(第4章)と続き、研究の目的、現象の捉え方、その特性の記述法などが詳しい。これらの研究の内、前二者は、著者が自然研究に身をおく契機となったもので、その点に関しての記述、く研究との出会いも興味深い。北海道における「海水と気象・気候」に関する研究も著者の大学教員としての初期の研究体験であり、きわめて特異な気象

環境や研究現場が克明に紹介され興味を引く。

第2部では、「酸性雨」(第5章)の問題究明や「高層湿原の水環境」(第6章)の自然調査の一例を示し、さらには海外に目をむけ「メコンデルタの生活用水」(第7章)に関する調査研究の例が扱われている。酸性雨に関する研究では、著者の赴任地である千葉県における酸性雨の特性について深く研究し、その方法や結果など、きわめて詳細に報告されており、その手順など研究を志す学生諸君には多くの示唆を与えるものとなろう。第6章と第7章とは対照的で、人間活動の影響のきわめて少ない北海道北東部の自然環境調査とメコンデルタ地帯における用水確保のための生活環境調査との対比が面白い。特に後者では発展途上国での調査の実際をみることができ、興味深い。

第3部の「環境教育」については、先ず「環境教育システムと学生の環境意識」(第8章)で、著者の勤務する大学の環境教育システムの構築における幾つかの試みや研究成果が述べられているほか、その教育システム構築に向けての事前の調査ともいえる学生への環境意識調査の実施例が詳細に記されており、この分野において貴重なものといえよう。「環境調査事例」(第9章)では、学生に対するいくつかの演習授業の実施例をもって、その手法や結果など、きわめて具体的、かつ詳細に紹介されている。

以上のように本書は著者が実際に行ってきた研究、あるいは教育活動の実際とその成果を具体的に示す形で、環境研究の現場、そしてそこでの方法を紹介している。各章はそれぞれ独立し、採りあげられたテーマの間で特に関連はなく、いずれの章からでも読み進むことができる。また、それらのテーマは本書の性格上、限られたものとなっている。しかし、本書で貫かれている最も重要なテーマは、環境研究に際し、実際に現場に立ち、現場での感動を推進力として問題解決に取り組む姿勢、そしてその現場での観察・調査の徹底の姿勢、そのことの重要性であろう。将来、この分野の研究を目指そうとする学生から、既にその道にある若い研究者はもちろん、関連分野の仕事に関しても、調査し、研究することの意味、目的、そして何よりその方法を教えてくれるユニークな書といえよう。

(三谷 雅肆)